

## これからの教育を思うとき

小 柳 強

生涯学習概論の授業を通して、別府大学・短期大学部学生の仲間に入れてもらうことが出来、はや5年になろうとしている。この5年間は自分の生涯を振り返る時間であったし、またこれからどう生きなければならないかを問う私にとってよい生涯学習の時間でもあった。私が博多で生まれてまもなくして第2次世界大戦が始まり、滅私奉公・耐乏生活・向う三軒両隣・軍国主義・地域社会の絆等が教育・生活の上に重くのしかかってきた時代であった。昭和20年8月に敗戦を知り、戦後の苦しい生活が始まり、それは大変な食糧難時代で人は皆食べ物のみを求めて生きていた様な時だった。こんなとき、進駐してきたアメリカ兵の超文化的な生活を見、ただただ驚いた。このアメリカ文化に近づくと日本国民はあらゆる知識（教育）・能力を結集し、過去を通していろいろな問題点を解明しながら敗戦の苦しみをのり越えてきた。

その結果、目標アメリカの産業・経済をはるかに抜き、かつてない繁栄をもたらした。この繁栄は環境問題をなおざりにする企業を生み、会社のためには家庭をかえりみない人間をつくり、学校はその機能をなくし、その上地域社会の絆もなくすという我々が想像もしていなかった社会をつくり出してしまった。ここに21世紀を迎え本格的な高齢化社会の到来、小子化の進行、ライフスタイルの多様化、産業構造の変化、等にともない、これまでの仕組みが見直されなければならない大きな変革の時代がやってきた。こんなとき、これからの日本の教育はどうあるべきかという、これまでの一般論的な設問が設定しにくくなってきたことは言うまでもない。学校の崩壊・教育の崩壊・家庭の崩壊・規範の崩壊が言われている。少年犯罪の急増や不登校・学力低下といった青少年に関する問題が深刻化し教育の危機が叫ばれている。物があふれ技術革新の激しい時代に生きる今の子ども達の多くは偏差値を競い、有名校に入学し一流企業に就職するといった部分的かつ刹那的で将来何をしたいかという希望もなく、人生の本当の素晴らしさを見失っている。教育問題は教育現場だけの問題ではない、まして批判するだけでは何の解決にもならない。

この解決策の一端は、家庭の両親はもとより学校を終えた社会人総べてが教育の現場を実際に見、評論家になるのではなく自らできることを探し出し行動し解決していく力をつけることであろう。教育は学校教育だけではなく、そこに至るまでの家庭教育、そこから出てからのいろんな社会教育がある。家庭教育を母親に、学校教育を教師に任せきりにせず、家庭・学校・地域（企業）等の社会人総べてが積極的に教育にかかわるべきである。もう一方の解決策は、企業・芸能界・スポーツ界等で活躍している先輩が母校で在校生に対し自分の体験談を話す機会をもち学生を指導することである。これは学生が実社会を学ぶうえで何よりもまじりの学習になる。学校と社会が交流することで学校の苦労や社会の要望も互いに理解でき教育現場を社会全体で明確に支援できるのである。以上これからの教育は立場を異にする人々のコミュニケーションではなかるうか。学生は家庭・学校・社会（地域・企業）で様々な立場の人々と対話することにより物事を多面的にとらえ、他人の経験を参考に、自分なりの生き方を見つけ出し、一つの型にはまらず、創造力を高め、個性を伸ばしながら人にやさしい心をもつ人間になることである。このような教育基盤のもと平成13年度の授業がすすめられたら幸いである。

（こやなぎ・つよし 大分県国際交流センター 語学担当 別府大学非常勤講師）